

「絵に拠って名馬を求む」

昔、孫陽という人がおり、馬を鑑定するのに長けていたため、人々から「伯楽」と呼ばれた。孫陽は馬の鑑定に関する自らの知識と経験に基づき、『相馬経』という書物を著した。この本の中には様々な馬の絵も掲載されていた。孫陽の息子がそれを読んで、自分が馬の鑑定能力を会得したと思い込み、本を持って名馬を探しに出た。ある日一匹の大きなガマガエルを見つけ、喜んで家に持ち帰り、「千里の馬を一頭見つけたんだ、蹄だけ違うけど」と父に言った。父親はそれを見ると、泣くに泣けず笑うも笑えず、息子がここほど愚かだとは思ってもよらなかったのもので、冗談めかして言った。「この馬は飛び跳ねるのが好きだから制御しにくいね」。後世、孫陽の息子が書物の絵図に拠って千里の馬を捜し求めたことを「絵に拠って名馬を求む」と言い、事を為すのに特定の規則に無批判に拘ることを喩えるようになった。広く手がかりをもとに捜し求めることを意味する場合もある。

「立って話せば」

小林は長いことかけて、耳障りのよい言葉を選んで自分の軽率さと性急さを謝罪し、暁傑の許しを請うた。

暁傑は一言も言わず、静かにソファーに座ったままただうつむいてスマートフォンをいじっていた。

小林は熱くなって態度を一変させ、興奮で顔を赤くしてまっしぐらに最後の手段を出すことにした。

「じゃあもう君にまかせるよ。決定権は君にある。僕って人間は、せっかちでいつも切れる。しかし他に欠点はない。こうしよう、僕を受け入れるならそのまま座って動かない。受け入れないなら立って出て行ってくれ。そしたら今後僕はもう君に会わないよ！」

小林が言い終わるか終わらないうちに、暁傑はゆっくりと立ち上がってしまった。

「おい！」小林は顔色を変えた。

「あまり長く座っていると辛いよ」暁傑はにっこりと微笑んで言った。「立って話せば腰が痛くならないからね」。

「君の気分」

李標はイケメンでしかもユーモアに富んでいる。とりわけ、その独特な無表情なジョークに、周りはずいつい笑ってしまう。

ある日、李標は自分の髪がちょっと長いと思ったので、職場付近の理髪店に行った。店に入ると若い女性が実に親切そうに迎えに出て来て、彼の希望の髪形を尋ねるとすぐさまあれこれ作業に取り掛かった。シャンプーやカット、パーマ、ブローに至るまで全セット揃っている。だが李標はちょっとした点から、この理髪師が新米であることを見抜いた。自分の頭で技術の練習をしているテンポなのだ。しかし彼女の真剣さと一生懸命さに免じて、結局理髪師を換えてくれとは言わず、目を閉じて彼女の思うがままに任せていた。

最後に理髪師はやっと動きを止め、李標の後ろに立って「いかがでしょう」と満足気に尋ねた。

李標は目を開けて鏡の中の自分を見るといかんともし難いので、そっとささやいた。「君の気分がよければOKさ！」